



➡ 6月11日（火）平成30年度韓国姉妹校交流 活動報告会開催！

平成30年度の韓国姉妹校交流代表派遣生徒による報告会が行われた。プレゼンテーション形式で、参加生徒より交流活動の内容やホームステイの様子など写真を交えて楽しく紹介された。一年生にとっては韓国姉妹校交流への参加を考える良い機会となった。

<報告会の概要>

○研修の意義、目的

「国際社会での協調力」「異文化について理解し発展に寄与する力」「楽しみながら学ぶこと」

○韓国での研修内容

- ・ミチュホル外国語高等学校での授業参加

英語の授業はグループ活動が多く「物語を作る」という創作活動を行う。挙手率の高さに驚かされた。ミチュホルの生徒は廊下で声を掛けてくれたり手を振ってくれたり、非常に歓迎ムードであった。

- ・仁川自由経済区域のソンドツアー

韓国では国際社会での競争力を上げるため、自由経済区域（複合施設や多国籍企業を誘致し、一箇所にまとめたもの）を設定している。それらは経済的にだけでなく、周囲の安全や環境にも配慮した次世代的なものになっている。

○研修を通して学んだこと

現地へ行き、その土地の言葉を使うことでより楽しく交流を深められたと強く感じた。交流の第一歩として積極的なコミュニケーションは非常に重要である。交流を通して価値観の違う友人を持つことができ、異文化の体験を通して批判するのではなく比較することの大切さに気付くことができた。

<報告会参加生徒の感想>

- ・隣の国でも日本とは違う文化が営まれていて違う価値観の人がいるということが、当たり前のようで新鮮だと改めて感じた。(14R Oさん)
- ・異文化を学ぶ上でまず自国の文化をしっかりと理解することが重要だと思った。そして異なる文化や価値観の人との違いを楽しむことが国際協調につながるのではないかと思った。相手の人柄そのものを見ることができることが、実際に会って交流することの良さだと分かった。(18R Sさん)
- ・違う国の人との関係をつくる時に、相手を「違う国の人」というようにフィルター越しに見るのではなく一個人として接する、という言葉が印象的だった。今はまだ政治的な問題もあるが私たちが大人になったときにこの交流の意義を再確認できると聞いて、私も現地の人と長く残る関係性を作りたいと思うことができた。(21R Kさん)



➡ 6月17日（月）キャロリン・ガイ(Carolyn Guy)氏によるご講演

ニュージーランド大使館より、キャロリン・ガイ(Carolyn Guy)参事官をお迎えし、ダニーデンの街の様子や生活についてご講義いただいた。またガイ氏は、姉妹校であるコロンバ・カレッジの卒業生でもあり、学校の歴史や教育理念等についてもお話しくださった。

ダニーデンの街は自然が豊かで、ペンギンやアザラシなど、さまざまな野生動物を見ることができる。歴史的な街並みが美しく、教会や駅舎など多くの建築物を楽しむことができる。

直後の質疑応答においても、ガイ氏の実体験などに基づいて、インターネットや書物では見つけられない情報を得ることができ、ニュージーランドでの生活をより身近に感じた。今後プレゼンテーションの内容を深めるうえでも、大変有益な時間となった

後半は、プレゼンテーションを行いフィードバックをいただいた。日本の文化や学校生活に前回の検討会で JET や昨年度派遣生の先輩方にアドバイスをいただいたことを活かして、改善されたプレゼンテーションを行うことができ、ガイ氏からも多くの肯定的なコメントをいただくことで自信につながった。

◆ 6月17日(月)「渋澤栄一の『論語と算盤』で未来を拓く」渋澤健氏講演(一橋大学)

6月17日(月)ボストン・ニューヨーク研修参加者12名が一橋大学で行われた渋澤健氏の講演会に参加した。渋澤栄一著の『論語と算盤』の持つ意味を踏まえ、未来を拓くために必要なことを学ぶ内容であった。

<講義内容>

1 『論語と算盤』から学ぶ現代社会の在り方について

論語はいつの時代も変わらない、人生の指針となる美德の象徴である。一方算盤は、経済、経営を表す。一見この二つは異なる分野のように感じるが、それらのどちらかを“or”で選択するのではなく“and”で両方を繋ぎ合わせる。これが創造の力であり、想像力と共にAIには持てない人間の武器になる。これこそがSDGsに示されるような課題を解決する鍵となる。

2 渋澤氏のビジネス経験を踏まえた聴講者へのメッセージ

未来を予見することはできないが、歴史は周期的に繰り返す。携帯電話の普及によって個人の考え方が以前より反映されるようになったからこそ、人々の気持ちをより考え、諦めないことが大切だ。人々との繋がりを保ち、感謝することは幸せにもつながる。

<感想>

物事の内部には複雑に思えることも外部から見ると単純である。そういうことはよくあることだ。今回一つのクイズを通じてそれを実感した。現在私たちは、プレゼンの準備など課題を進める上で、客観的な視点を忘れてしまうことがあるが、時には俯瞰して、偏りや複雑化を防ぐことが大切だと分かった。また、andの力、すなわち想像を活かした創造力は既存の枠を超えるのに必要な力であると知り、矛盾するものを柔軟に合わせる重要性を学んだ。講演の後、一橋大学学生との交流も興味深い話を聞くことができ、充実した活動となった。

◆ 6月18日(火)朝日新聞東京本社訪問「GLOBE編集長 望月洋嗣氏講演」

朝日新聞東京本社を見学の後、現GLOBE編集長である望月氏に「新聞とメディアの役割、アフリカ、アメリカ、GLOBE」と題してご講演いただいた。望月氏はこれまで、ナイロビ特派員(サハラ砂漠以南の48カ国を担当)、社長秘書、ワシントン特派員をご経験されている。そうした経験を元に、事前に送らせていただいた生徒の質問にご回答いただく形で話を進めていただいた。

日本で働くことと外国で働くことの違いについての質問については、やはり治安の問題が話題となった。ナイロビ特派員時代には銃を持った護衛を雇っており、毎日緊張感をもって生活されていたそうだ。外国に行けば「朝日新聞」のことを知っている人はいないが日本のことは知られており、「原爆のこと」、「武力を持たないこと」、「第二次世界大戦以降他国に侵略していないこと」などが語られ、好感をもたれているという。

複数の生徒から情報の中立性についての質問があった。仕事をする上では安全を確保しながら現場(取材地)に行くことを最優先に考えるそうだ。記者の存在意義は現地(取材地)に行き、当事者に会って話を聞くこと。根拠としていることが正しいかどうか調べる。事実を確認することで中立を保つ。また、中立を保つためには、「常に自分たちは偏る」ということも認識しておかなければならないとのお話もあった。(逆に偏らない世界って何だろう?という投げかけもあった)取材を進めているとあたかも自分が全てを知っているかのような錯覚に陥ることがある。「いかに自分が知らないか」、「歪んでいるか」ということを認識しながら仕事を進めることも大切。また、場合によっては感情が流入するこ

ともある。偏らないためにも必ず違う立場の方を取材することを意識していると伺った。

アフリカに対する質問について。アフリカという国はない。アフリカも様々で一つの国にフォーカスしても見えない。日本を語る時も、東京で語るのか地方で語るのかでは違ってくる。その前提で、自分の経験からアフリカの支援に必要なものを考えると、統治、教育が考えられる。中には政府がない国、社会インフラが極端に遅れている国もある。文字が読めることは大切。文字が読めないことで情報を上手に使えない。また算数も大切。算数ができないと買い物ができない。アフリカにおけるインターネットや携帯電話などの情報網は発達している。携帯電話をつかった送金などは日本よりも先に発達している。

ナイロビ支局での経験について。日本人は自分一人である。必要なスタッフは現地で雇う。先輩からのアドバイスで同じ部族の人を複数雇わなかった。同じ部族が2人、違う部族が1人だと、同じ部族の2人が自分たち部族の言葉で話し始め、仕事が回らなくなる。

ネットが発達している今、なぜ新聞なのかという質問に対して。活字メディアは一度出したら変えられない。紙面は視覚的に表現できる。一貫性があって読みやすい。興味あるものを読んでいると、その他の記事も目に留まり広がりがある。紙とデジタル、それぞれ良い所がある。

生徒の質問に対して1つ1つ丁寧に回答いただいた。「食料問題」の提言をまとめていく上でも有意義なアドバイスをいただいた。どうしても分からないことをどう解決したら良いかという質問に対しては、その問題に詳しい方に聞くのが一番という回答だった。足踏みしていても始まらない。フットワークを軽く人に会って話を聞く、一步を踏み出すことの大切さを感じさせられた。

事前に多くのことを調べて、疑問をもって現地に行くことが大切であると伺った。裏切られることも多いが、それが学びにつながる。事前準備の大切さについては、学校での学びも、仕事においても大切であると改めて感じる研修であった。

➡ 6月19日(水) G10ボストン・ニューヨーク海外派遣研修 OBOG との懇談会(プレゼン)検討会

6月19日、今年度ボストン・ニューヨーク研修派遣予定の5期生と、すでに本校を卒業した1、3期生のみなさんとの懇談会が実現した。忙しい大学生活の合間を縫って8名の先輩方が来校してくれた。卒業生と現役の交流は、昨年度より始まり、今年度も引き続き実施することができた。

現在5期生が苦勞してまとめている「食料問題についての提言」について、2グループに分かれてディスカッションし、有用な資料や、提言の方向性についてなどさまざまなことについて教えていただいた。同じ苦勞をしてきた先輩方からは、G10を通して学んだこととして「チームで何かを作り上げることの重要性」「知らなかったことを知る、視野の広がり」「自分の可能性を知ること」などについてお話しいただいた。

検討会の最後には、今回の企画を調整してくれたグローバル委員会初代委員長より、「妥協のない提言を作ってほしい。やろうと思えば何でもできる。諦める前に誰にでも相談してほしい。」とエールをいただいた。派遣生徒には、たくさんの人たちの支援を力にして、充実した提言をまとめてもらいたい。

➡ 6月24日(月) 農林水産省訪問

最初に省内見学をさせていただいた。省内は農林水産省らしく、木工品のデスクで統一され、暖かみのある奮起に包まれていた。各地の特産品やブランド米、特色のある果物などの様々なポスターが廊下を彩り、日本の農業の可能性を感じることができた。次に案内して頂いた1階は、食品が国際規格に対応するためのノウハウや、土壌問題、農薬に関する情報が展示されたオープンスペースだった。省内見学後は、農林水産省の若手キャリアの方々とは4つグループに分かれて、意見交換させていただいた。職員の方々の農林水産省入省のきっかけや、現在取り組んでいる事業など、多岐にわたるお話をいただいた。各事業における問題意識は様々であったが、共通して感じられたことは、日本をより良くしたいという意志であった。グループディスカッションでは、事前に用意した質問に職員の方が答えていく形式をとるグループや、自由に意見を発表していくグループなど、その方法は様々であったが、自分の意見を表明し、その意見に対する建設的なコメントをいただけたことは、非常に貴重な経験になった。国家レベルで問題を考える視点を学べたことはとても有意義であった。